

〈 目 次 〉

■ 今月のトップニュース	1
エネルギー・資源回収ワーキンググループが中間報告 —— 無公害システム開発の可能性を確認、回収実現へ一歩	
■ データ・ボックス	4
「'92東京国際包装展（東京パック）」でのアンケート結果から —— リサイクル意識高いが再生品の購入は価格次第	
■ インフォメーション	6
・ 塩ビ卵パックの回収テスト始まる —— 岡山市民生協と協力 ・ 再生塩ビのボールペンとシャープペンを試作 ・ 醤油メーカーなど5社でボトルボーイの試運転スタート ・ 向山光雄氏が第1回「リサイクル推進協議会会長賞」を受賞	
■ 海外事例紹介③	9
硬質塩化ビニール板協会の欧州調査団レポートから —— 英・仏・独・ベルギーのリサイクル事情などを視察	
■ 塩ビって何③	13
—— 塩ビは都市ごみ総量の1%、焼却炉の排ガス対策も充実	
■ 広報だより	14
・ 展示会への参加報告——「東京パック'92」「エコムケ'92」 ・ 消費者団体の招きで塩ビリサイクルなどテーマに意見交換	
■ 編集後記	16

■今月のトップニュース■

エネルギー・資源回収ワーキンググループが中間報告

無公害システム開発の可能性を確認

塩ビ廃棄物からエネルギー・資源の有効回収実現へ一歩前進

「PVCニュース」第3号のトップニュースは、『焼却』がテーマです。現在、我が国では廃棄物の7割が焼却によって処理されています。こうした状況の中では、塩ビ製品を焼却する際に排出される有用なエネルギーや資源を回収・再利用することも、製品自体のリサイクルと同様、極めて重要な試みといえます。エネルギー・資源回収ワーキンググループでは、社団法人・化学工学会の協力を得てそうしたシステムづくりの研究を進めています。このほどその作業状況の中間報告が出されました。報告はシステムの基本的な部分についての可能性を確認した段階に過ぎませんが、効率的な回収が決して夢ではないことが認められたという点が貴重な一歩といえます。

◆「無公害焼却モデルプラント」の実現めざしシミュレーションテスト

約60%が食塩、残りが石油からできている塩ビは、焼却すると塩化水素と熱エネルギーを放出します。これらを回収して発電や蒸気などに利用するシステム（無公害焼却モデルプラント）の基本設計を作ることがエネルギー・資源回収ワーキンググループの研究テーマですが、システムに用いられる個々の技術や焼却条件の違いで、設計の内容は様々に異なってきます（例えば焼却炉の性能や材質、1時間当たりの焼却量の多少、廃棄物中の塩ビや不燃物・可燃物の混入割合、連続運転の場合と断続運転の場合など、全部で128通りのケースを想定）。このため、それらの多様なプログラムの中から最も効率的でコスト的にも実現性のあるシステムを探り出すためのシミュレーションテストが現在進められているわけです。

◆国の環境基準はクリア、コスト面では【ガス化タイプ】の有効性を確認

今回の中間報告には、とりあえず「焼却量5t/hr、廃棄物の組成は塩ビ30%・ポリエチレン70%（水分5%）で、連続運転を行った場合」という、最も作業しやすい理想的な条件を設定した場合のテスト結果がまとめられています。テストでは、この条件設定に基づいて、

① ガス化タイプ

廃棄物の前処理（粉砕、プラスチックの分離等）後、プラスチックを熱分解（350℃で蒸し焼き）して塩化水素を回収および中和（食塩に戻す）した後、焼却して熱エネルギー（電力・蒸気）を回収する方式

② 燃焼タイプ

前処理後、直接焼却して、熱エネルギー回収と塩化水素の回収・中和を行う方式という2通りの基本システムについて、シミュレーション・プログラムのランニング・テストが行われました（塩化水素の回収を行う場合と、これを省いて中和のみを行う場合など部分的な工程の違いがあるため、代表的なシミュレーションのプロセスとしては計8通りとなった）。

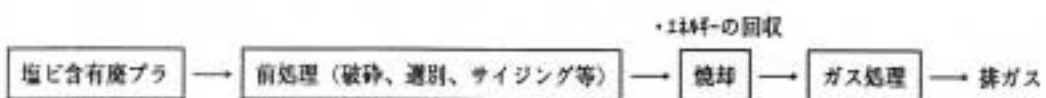
この結果、上記の条件下では、両タイプとも国の定める環境基準を問題なくクリアできることを前提に、①の【ガス化タイプ】が建設コスト、ランニングコストいずれにおいても、②の【燃焼タイプ】を下回ることが確認されました。特に、【ガス化タイプ】のプロセスでは建設費が約30億円強（暫定的な試算値）、ランニングコストもトン当たり約3万円と安く、【燃焼タイプ】（建設費はガス化タイプの1.5～2.5倍）との間に大きな開きが認められました。

工程の複雑な【ガス化タイプ】のほうがコスト面で有利であるという事実は、研究に携わる者にとってもかなり意外な発見でしたが、これは【燃焼タイプ】の場合、塩化水素の回収が最終工程となるため、全工程を通じて耐食・耐熱性素材を使った処理量の大きい機械を使用しなければならないことなどに原因があるものと判断されます。なお、回収された塩化水素や熱エネルギーは、副生製品として売却されれば当然コスト低減の価値を生むものです。

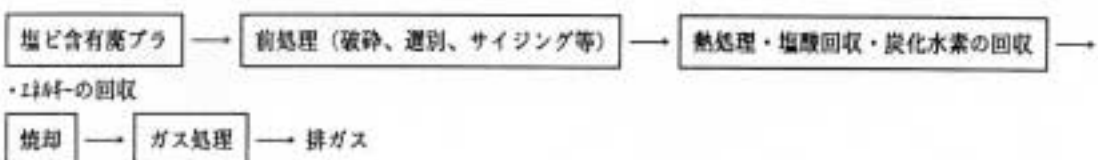
◆より複雑な条件下で研究を継続、来年3月には最終報告をとりまとめ

今回のテストはまだ基礎的な段階に過ぎませんが、「塩ビ廃棄物からエネルギー・資源を回収する無公害システムの開発が可能である」という基本的な方向を確認できた点で極めて重要な意味があったといえます。また、いくつかのプロセスの中からより効率的なモデルを発見できたことも、今後の研究を進める上で大きな推進力となることは間違いありません。エネルギー・資源回収ワーキンググループでは今後、先のテスト結果の再検証などを行いながら、廃棄物に土砂等が混入している場合の前処理の方法など、より複雑で多岐にわたる条件設定に基づいた研究を進めていく計画で、来年3月ごろにはその最終報告を提出する予定です。

●燃焼タイプのシステムフロー



●ガス化タイプのシステムフロー



■データ・ボックス■

※「'92東京国際包装展」でのアンケート結果から

高い再利用意識、再生品購入は価格次第

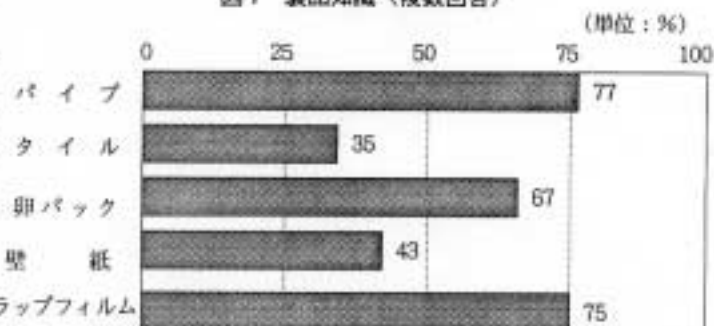
男女1,355人に塩ビの基礎知識、リサイクル意識などを質問

塩ビリサイクル推進協議会では、去る9月25日～29日に開催された「'92東京国際包装展」(14ページ「広報だより」参照)の来場者を対象にアンケート調査を実施しました。塩ビに関する基礎知識やリサイクル意識などを尋ねたものですが、このほど、その調査結果がまとまりましたので概要をご紹介します。全体の傾向としては、リサイクルに対する意識は極めて高いものの、再生品の購入意向という点ではやや消極的な姿勢が目立つ結果となっており、再生品が定着するためにはやはり価格の問題が最終的なカギであることを示しています。なお、サンプル数は10代～60代の男女計1,355人(男性1,239人：女性116人)となっています。

●塩ビ製品の知識 — 「パイプ」「ラップフィルム」は8割近くが認知

塩ビ製品として最も知られているのは「パイプ」と「ラップフィルム」で、ともに8割近い認知度となっています。「卵パック」についても過半数の人が知っていますが、「タイル」「壁紙」など生活の裏方的な所で活躍している塩ビには、なかなか関心が向かないようです。

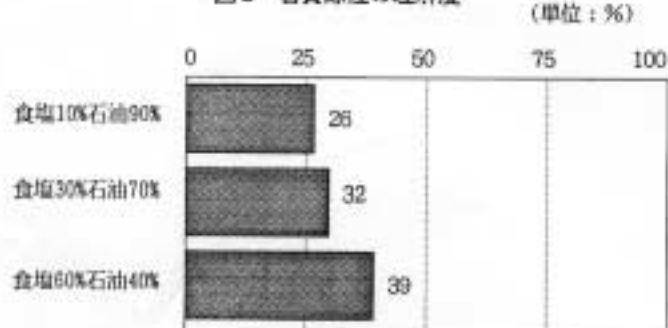
図1 製品知識(複数回答)



●塩ビの省資源についての理解 — 依然根強い“石油消費型”のイメージ

塩ビが60%の食塩と40%の石油でできている省資源型資材であることを理解している人は39%。回答率は最も高いものの、半数には達していません。一方食塩30%－石油70%、食塩10%－石油90%

図2 省資源性の理解度

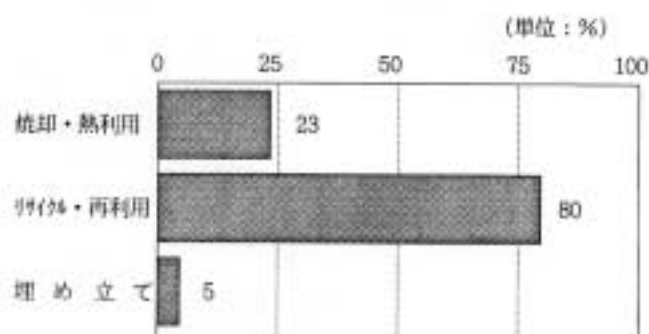


といった誤った答えが合計6割近くもあり、塩ビは石油が主成分というイメージが依然根強いことを示しています。

●プラスチック廃棄物の処理法 —— 圧倒的多数が「リサイクル・再利用」を支持

プラスチック廃棄物の処理については、圧倒的多数が「リサイクル・再利用」すべきだと答えています。他の方法では「焼却・熱利用」を支持する人が約4分の1見られますが、「埋め立て」はわずか5%に過ぎませんでした。

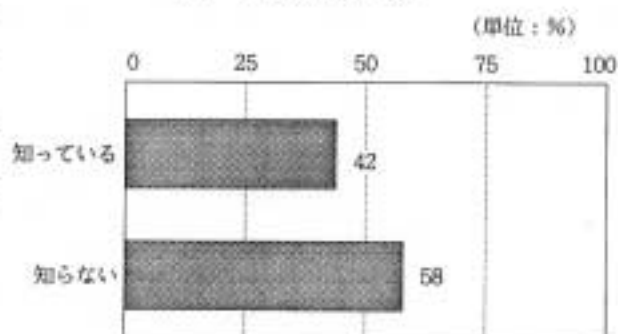
図3 処理法（複数回答）



●塩ビの再利用状況の認知度 —— 過半数が知らない電線用塩ビ等のリサイクル

この項では、農業用フィルムの40%、電線用の16%がリサイクルされている塩ビの再利用状況に関する認知度を尋ねています。一般の生活では見えにくい部分だけに、過半数が「知らない」と答えており、「知っている」と答えた人は半数に達しませんでした。

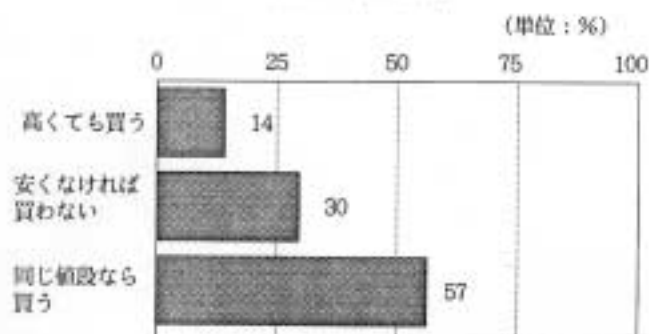
図4 再利用状況の認知



●再生品の購入意向 —— 「高くても買う」は少数派、半数が「同じ値段なら」

最後に再生品の購入意向を尋ねました。一般製品と「同じ値段なら再生品を買う」という意見が57%で最も多くなっていますが、一方で「安くなければ買わない」という消極派も3割に達しています。「高くても買う」という積極派は14%と、消極派の約半分にとどまっており、再生品の定着はやはり値段がカギとなることを示しています。

図5 再生品の購入意向



■インフォメーション■

●塩ビ卵パックの回収実験始まる

——岡山市民生協がテストケースとして協力

塩ビ卵パックリサイクルワーキンググループは、このほど岡山県の岡山市民生協同組合（岡山市奉還町、組合員18万人）のご協力により、塩ビ卵パックの回収テストに着手しました。同グループでは、モデル回収システムの構築をめざして、かねてから流通業界に協力を呼びかけていましたが、既に牛乳パックや食品トレーなどの回収で実績を上げている同生協が、「今後のテストケース」としてこの呼び掛けに応じたものです。回収作業は、同生協が経営する4店舗のひとつである東川原店（岡山市東川原）で既に10月からスタートしており、同グループでは作業の状況、消費者の反応などを見ながら、テストの継続期間等を調整していく考えです。

回収の具体的な仕組みは、まず組合員が家庭でホチキスの針やバーコードラベルなどを取り除き洗浄した後、これを東川原店に設置した回収ボックスに投入。回収日は毎週月曜日で、翌火曜日には段ボールに詰めて滋賀県長浜市内の樹脂メーカーの工場に発送され、ここで粉碎されるというシステムになっています。



東川原店は、来客数が1日平均2,000人（日曜日は2,700人）、卵の売り上げは1日平均500パック（特売日には1,800パック）という規模で、現在は回収率の向上のため、組合員への周知徹底が進められています。「卵パックの回収は初めての試み」という岡山市民生協では、「東川原店でのテストケースの結果を見た後、生協全体で取り組んでいくかどうか検討したい」としていますが、同生協がこうした前向きな姿勢を示している背景には、行政と住民が一体となったリサイクル運動を展開している岡山市の土地柄も大きく影響しているようです。

なお、塩ビ卵パックリサイクルワーキンググループでは、今回のテストにより経済的・合理的な回収システム構築のための具体的なデータ収集、再生品の検討などを行う計画です。これらのテスト結果についてはまとまり次第、改めて詳細をご報告することとします。

●文具メーカーの協力で再生塩ビのボールペン・シャープペンセットを試作

小型減容機「ボトルボーイ」を使った塩ビボトルリサイクル実験の現状については前号(第2号)でもお伝えしましたが、塩ビボトルリサイクルワーキンググループではこのほど、使用済みボトルから作られた再生塩ビを原料に、ボールペンとシャープペンの試作品を開発しました(写真)。



再生塩ビの試作品第1号となったボールペンとシャープペンは、2本でワンセットとなっており、ペン軸の部分に再生塩ビが使用されています。ペンの長さはいずれも11.5cmのミニサイズで、透明の地に黄色とピンクで彩色した親しみの持てるデザイン。これまで計5,500セットが製造されており、その一部は「東京国際包装展」や「エコケム'92」、ボトルボーイ試運転見学会などの来場者に配布されました。受け取った方々の反応は概ね好評で、試作段階とはいえ塩ビボトルの再生品でも品質的に安定した製品ができることを確認できたことは、今回の大きな収穫と言えます。

また、企画・製作に当たっては、再生紙ノートなどリサイクル商品の開発に実績を持つ文具メーカー・極東ノート㈱(本社・大阪府吹田市、佐野俊雄社長)にご協力いただきましたが、同社商品企画課では「塩ビボトルリサイクルのニュースをうちの社員が新聞で見ても、何か協力できることはないかと考えてこちらから協議会に働きかけた。性能的にもデザイン的にも全く見劣りのしないものができたと思う。商品化のためにはコストの問題などまだ課題が残されているが、プラスチックのリサイクルは文具メーカーにとっても重要なテーマだと考えているので、今後も塩ビ業界の試みにはできるだけ協力していきたい」と積極的な姿勢を見せています。

●「ボトルボーイ」5台を増設、醤油メーカー等5社と共同試運転開始

塩ビボトルリサイクルワーキンググループは、10月までに小型減容機「ボトルボーイ」5台を新たに購入し、現在、醤油メーカーなどの協力で、その運転実験が進められています。実験にご協力いただいているのは、醤油メーカーのサンアスベルフーズ(大分市)、ニビシ醤油(福岡市)、イチビキ(名古屋市)、正田醤油(館林市)と、成型メーカーのエンゼル産業(福島市)の5社。同グループでは年内にさらに5台の増設を予定しており、極東ノートとの協力で再生品の試作が行われたこととあわせて、塩ビボト

ルリサイクルの輪は順調な広がりを見せています。

●向山光雄氏が第1回「リサイクル推進協議会会長賞」を受賞

リサイクル運動の普及・啓蒙機関「リサイクル推進協議会」（会長＝近藤次郎日本学術会議会長）は、去る10月23日、第1回目のリサイクル推進功労者表彰式を開催し、通産省等関係省庁の大臣賞、リサイクル推進協議会会長賞など計216件の表彰を行いました。この表彰式は、リサイクルの推進に広く貢献した個人・団体の功績を顕彰するため設けられたもので、塩化ビニル工業協会の推薦を受けた向山光雄氏（前塩化ビニル工業協会会長）にはリサイクル推進協議会会長賞が贈られました。塩ビ業界の関係者がこうした賞の対象となったことで、今後のリサイクル活動にも大いに弾みがつきそうです。

■海外事例紹介③■

硬質塩化ビニール板協会の欧州調査団レポートから

欧州4カ国のリサイクル事情などを視察

多くの教訓を得た英・マークス&スペンサー社、仏・GECOMの取り組み

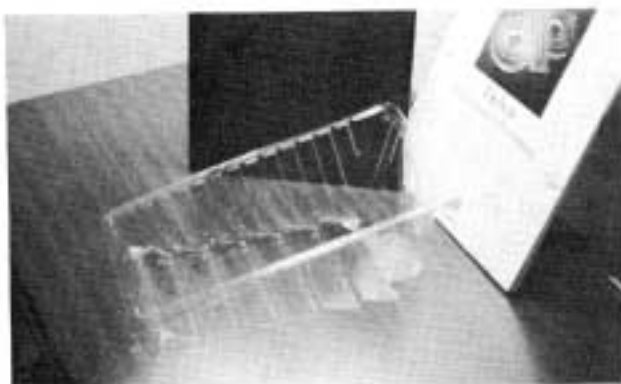
当協議会の構成メンバーである硬質塩化ビニール板協会のフィルムシート部会は、去る9月7日～17日の日程で欧州に調査団を派遣し、同地におけるPVCの環境問題の取り組み状況、業界の広報活動などについて精力的な調査を行いました。訪問国は英仏独およびベルギーの4カ国で、調査団の一行は、スーパーマーケット、シートメーカー、成形加工メーカー、PVC業界と関係団体、さらにはリサイクル会社など幅広く現場の状況を視察して、数多くの話題を持ち帰って来ました。今回の「海外事例紹介」は、帰国後まとめられた報告書の中から、欧州におけるPVCリサイクルの現状を伝えるトピックスを2件ほどご紹介してみたいと思います。

『 ストレート・オン・トレイのM & S社訪問、リサイクルへの積極姿勢に感銘 』

調査団に参加したのは立部智士（住友ベークライト）、森道雄（信越ポリマー）、露口邦義（チッソ）、斎藤節（三菱樹脂）の4氏。一行は最初の訪問地ロンドンで、英国の大手スーパー、マークス&スペンサーの本社とカーディフ店を訪れ、その環境対策の現状を視察しました。



同社におけるPVC製ストレート・オン・トレイ（商品を入れたまま店の棚に置くトレイで、補充作業を容易にする）のリサイクルの試みについては、既にPVCニュース第1号でも詳しくご紹介しましたが、今回の訪問では、同社の包装資材に対する考え方を、責任者である環境問題技術部長L.M.Randall氏から直接伺うことができました。また、カーディフ店では、PVC製品がストレート・オン・トレイだけでなく、果物ト



レーやサンドイッチパックなどの食品包装、トイレタリーのボトルなどに予想以上に幅広く使用され、店頭を飾っているありさまを直接目で見て確認することができました。

Randall氏によれば、包装資材に関する同社の方針は極めて明快で、さまざまな包装資材の良い点と悪い点を把握し、もちろん環境に対する影響度も考慮に入れて素材を選定しているということです。プラスチック包装については、「食品衛生と輸送面を考慮すると必要不可欠であり、お客様の立場からもプラスチックなしではやっていけないと確信している」と、氏は語っています。

その中で、PVCは他の樹脂と比較すると、①原料として原油だけでなく食塩を用いるため省資源型であること、②リサイクルしやすいという優位性を持っていることなどが評価のポイントとなっており、このため、同社では包装材の素材をなるべくPVCに統一すべく納入業者を指導しているとのことでした。話題のPVC製ストレート・オン・トレイのリサイクルについては、包装材の素材が統一される1993年早々にも本格的にスタートする方針とのことで、こうしたリサイクルに対する同社の積極的な姿勢に、調査団の一行も大いに感銘を受けたようです。

『 フランス GECOM に見るプラスチックボトルのリサイクルの取り組み 』

9月10日には、フランスのGECOM（本部パリ）で、リサイクルに関する同国の法規制の現状、関係企業の取り組みの状況などについて話を聞きました。

GECOMは、PVC、PE、PET等の原料メーカー、ミネラルウォーター会社、洗剤メーカーなどプラスチック包装に携わる企業の団体で、広報活動を主な目的とする組織です（1993年にはVALOR PLASTに名称変更の予定）。ミネラルウォーターのボトルとしてPVCを大量に使用しているフランスで、そのリサイクルがどこまで進んでいるのか



を知ることは、今回の調査の中でも大きな目的のひとつでした。

フランスでは92年4月に、ガラス、紙、鉄およびプラスチック包装材の75%を10年以内にリサイクルする（焼却を含む）ことなどを定めたリサイクル法案が国会に提出されていますが、一方では、ECの法案に則した排ガス処理なども必要となっています。

こうした状況に対応するため、GECOMではプラスチック包装材のリサイクル対象を、①ショッピングバッグ等フィルム類②ボックス・容器類③ボトルの3つに大別し、当面の目標として③のボトルを中心とした取り組みが、PVC、PE、PETそれぞれのワーキンググループによって現在進められています（①については薄物フィルムで取り扱いが難しいため焼却することとし、②は将来リサイクルの対象とするが現状では検討中との位置づけ）。

フランスにおけるプラスチックボトルは、プラスチック包装材全体の38%を占めますが、業界では10年以内にその35%をリサイクルする目標で、当面96年までに計4万トン（PVC1万8,000トン、PE4,000トン、PET3,000トン、ミックス品他1万5,000トン）のリサイクル達成という計画を立てています。

リサイクルの方法は自治体が責任者となり、業界が回収品の処理に当たる（GECOMは自治体に対して回収方法の指導協力等を行う）というのですが、既に91年の実績で4,000トン、また92年見込みでは8,000トン（ボトルとして2億本）まで取り組みが進んでいます。また、この回収作業のために現在約3,000個のコンテナが設置されており（93年には5,000個に拡大する計画）、回収システムに携わる関係者は約600万人、フランスの全人口の10分の1に達するということです。

●塩ビ再生品の開発も順調 —— 靴底、アスファルト充填剤などに利用

一方、回収品の加工についてはGECOMと契約した企業により製品開発が進められています。PVCの場合リサイクルが容易という特性もあって、靴底、アスファルトの充填剤、パイプ、床材のバック材など二次用途の種類が多く、特に問題はないとのことでした。また、リサイクルに要する費用は、包装材メーカーおよび実需者のすべての対象企業が拠出した基金により賄われていますが、最終的には消費者が負担する仕組みになっています。現在はボトルの回収のみに基金を使用しているため、資金面でも今のところは問題なく対応しているようです。なお、GECOMでは92年からの10年間に必要な資金を24億フラン（約600億円）、うちプラスチック関係で12億フランと試算しています。

以上のほかにも、PVC産業界が常に環境保護団体と共同で問題解決に臨んできたことなど、フランスのリサイクル事情には、我が国でも今後参考とすべき要素が数多く含まれており、調査団にとっては非常に収穫の多い訪問となりました。

■塩ビって何③■

塩ビは都市ごみ総量の1% 焼却炉の排ガス対策も充実

生活の中に定着しているプラスチックは、ごみとしてもかなりの量が出るように思われがちです。しかし、都市ごみの中に含まれるプラスチックの割合は約10%で、これは欧米先進国においてもほぼ同様の傾向が見られます。また、プラスチックごみの中の塩ビの比率は、日本をはじめ各国ともほぼ10分の1で、都市ごみ総量の1%程度となっています。

また、塩ビを燃やすと塩化水素ガスが発生することから、大気汚染や酸性雨の原因になるのではと心配する人もいます。しかし、都市ごみを焼却すると塩ビ製品以外の紙や草木、生ごみ、皮革などからも塩化水素ガスが発生することが確認されています。つまり、塩化水素ガスの発生はごみ全体の問題なのです。現在、日本では都市ごみの7割強が焼却処理されていますが、日本の焼却炉では塩化水素だけでなく窒素酸化物(NOx)や硫酸酸化物(SOx)などについても排ガス対策が完全に実施されており、焼却炉からの大気汚染は特に心配はされていません。

一方、焼却で発生するダイオキシンについても、都市ごみを焼却する時だけでなく、タバコの煙、炭焼きステーキなどさまざまなものから検出されています。都市ごみの中にも、食塩をはじめ塩素源となるものが数多く含まれており、すべての塩素源が、特定条件の下では、ダイオキシンの発生に何らかのかかわりを持っていると考えられます。塩ビもその塩素源のひとつですが、実験の結果では、塩ビの混入量とダイオキシン類の生成量の間には関連がないことが確認されており、また、ダイオキシンの発生は適切な焼却管理で抑制できることも分かっています。むしろ、焼却設備の構造や操業条件などが関係しており、現在は厚生省によって適切な焼却管理指導が行われています。

●各種組成の廃棄物と焼却時に発生するダイオキシンの関係

廃棄物組成	塩素含有率 (%)	ボイラー出口部の ダイオキシン濃度 (ng/Nm ³)
都市ごみ	0.39	14~36
都市ごみ+塩ビ	1.15	19~34
段ボール・木くず	0.05	19
段ボール・木くず+塩ビ	0.33	20~31

(注) 焼却温度は 980℃

<資料> ニューヨーク州エネルギー研究開発公社はか連邦、州政府
機関 (12州体) の共同研究報告書 (1987年)

■広報だより■

★「東京パック'92」「エコケム'92」に出展、塩ビリサイクルの現状などPR

塩化ビニルリサイクル推進協議会ではこの秋、「'92東京国際包装展」「エコケム'92」にあいついで出展し、塩ビの基礎知識やリサイクルの取り組み状況などについてPRを行いました（写真は「東京国際包装展」での出展風景。中央が山口敏明当協議会会長）。



- 初の再生品「ボールペン・シャープペンセット」を配布（東京パック）

「東京国際包装展」(TOKYO PACK) は、(社)日本包装技術協会の主催で毎年開かれているもので、今回は去る9月25日から29日まで、東京晴海の国際見本市会場で開催され、内外の包装資材・包装機器メーカー25団体・633社が出展。環境問題をテーマとした展示も多かったせいか、来場者数も5日間で延べ20万7,000人を数え、近年になく注目度の高い展示会となりました。

当協議会では期間中、パンフレット・資料類の配布やパネル展示、ビデオの上映などにより、塩ビの正しい知識やリサイクル活動の現状などをPRしましたが、中でも、塩ビボトルの再生試作品として初めて開発されたボールペンとシャープペンセットへの関心が高く、用意した1,500セットでも不足が出るなど、5日間を通して強い手ごたえを感じることができました。

- ボトルボーイのデモンストレーション運転を実施（エコケム'92）

一方、(社)日本化学工業協会、(社)日本化学会などが中心となって開催している「地球と暮らしにやさしい化学展－エコケム'92」(Ecological Chemistry Exhibition) は、千代田区北の丸公園の科学技術館を会場に、10月1日～3日の3日間にわたって開催されました（出展数15団体・39社）。こちらでは、「東京国際包装展」と同様のPR活動を行ったほか、1日3回、小型減容機ボトルボーイのデモンストレーション運転を実施して注目を集めました。来場者の中には、「他のプラスチック類との分離はどうするのか」「再生品の開発計画は？」などと係員に質問する人や、減容化された塩ビボトルのフレークを興味深そうに手に取って眺める人の姿も見られ、リサイクルに対する関心の高さを感じさせました。

★ 消費者団体の招きで塩ビリサイクルなどテーマに講演・意見交換

塩化ビニルリサイクル推進協議会は去る10月12日、武蔵野市消費者運動連絡会（斎藤富佐恵会長）の招きに応じ、協議会の取り組みの現状などについて講演を行うとともに、参加した同会のメンバーや市の行政担当者との間で、ごみ問題の解決へ向け活発な意見交換を行いました。

焼却時の排ガス対策の徹底など、積極的な廃棄物行政を展開する武蔵野市では、行政・消費者が一体となった勉強会が盛んに進められており、これまでも（社）プラスチック処理促進協会など個別に団体を招いて、その話を聞く機会が設けられてきました。今回は「塩ビ業界の廃棄物処理に関する話を聞きたい」との同会からの招きで、当協議会から酒井・久保木両委員が出席。会の活動内容、塩ビの特性や用途、廃棄物処理などをテーマに、午前10時30分からおよそ1時間にわたって講演を行いました。

会場となった武蔵野市クリーンセンターの見学者ホールでは、同会会員や市の行政担当者などおよそ30人の参加者が、酒井委員らの話に熱心に聴き入っていましたが、講演の後に設けられたディスカッションの時間では、「自治体のごみ処理現場はこれまで非常に苦労してきた」「塩ビのごみを焼却すると排ガスの中和に費用がかかり、発生する塩の処理もたいへんだ」「プラスチック製品は材質表示マークを明確にして分別がしやすくなるようにしてほしい」「生活者の声を反映するため協議会の組織に女性を加えてはどうか」などの意見が出され、消費者団体と当協議会初の会合は充実した雰囲気うちに幕を閉じました。

出席後、酒井委員らは「こちらの話に非常に熱心に耳を傾けてもらい、ごみ問題に取り組んでいる市民の切実な思いが伝わってきた。行政関係者のご苦労もよく分かったが、同時に塩ビ業界のリサイクルの取り組み姿勢についてもご理解いただけたと思う。ごみ問題ではみんなが苦労しているのであり、関係者すべてが協力していかなければ問題は解決しない。今後も同様の招きがあれば、積極的に応じていきたい」と感想を語っています。

■協賛企業 (50音順) ■

アキレス㈱	三宝樹脂工業㈱	チ ッ ソ㈱	日本プラスチック工業㈱
旭硝子㈱	山陽モノマー㈱	千葉塩ビモノマー㈱	日本ロール製造㈱
アサヒ合成工業㈱	三和合成工業㈱	簡中プラスチック工業㈱	バンドー化学㈱
旭有機材工業㈱	シーアイ化成㈱	帝都ゴム㈱	日立ボーデン㈱
アロン化成㈱	ジーエル化学工業㈱	錦デコリアクロス	平岡織染㈱
オカモト㈱	信越化学工業㈱	錦テスコ	広島化成㈱
鹿島塩ビモノマー㈱	信越ポリマー㈱	電気化学工業㈱	富双合成㈱
金町ゴム工業㈱	住友化学工業㈱	東亜合成化学工業㈱	プラス・テック㈱
鐘淵化学工業㈱	住友ベークライト㈱	東永化成㈱	前澤化成工業㈱
関東レーザー㈱	スワロンパイプ㈱	東栄管機㈱	又永化工㈱
岐阜興㈱	ゼオン化成㈱	東ソ一㈱	丸喜化学工業㈱
岐阜プラスチック工業㈱	積水化学工業㈱	東武化学工業㈱	マルト㈱
協同化成工業㈱	セントラル化学㈱	東洋クロス㈱	丸山工業㈱
共和レザー㈱	ダイニック㈱	東洋防水布製造㈱	マロン㈱
関クボタ	大日本印刷㈱	トキワ工業㈱	三井東洋化学㈱
クラレプラスチック㈱	大日本プラスチック㈱	徳山積水工業㈱	三菱化成㈱
呉羽化学工業㈱	太平化学製品㈱	凸版印刷㈱	三菱化成ビニル㈱
グンゼ㈱	大洋化学工業㈱	㈱ナンカイテクノート	三菱樹脂㈱
小松化成㈱	タキロン㈱	新潟化工㈱	三星産業㈱
サクラポリマー㈱	大和化成工業㈱	日本ウエーブブロック㈱	明和グラフィック㈱
サミット樹脂工業㈱	鐘高藤化成	日本カーバイド工業㈱	ヤマト化学工業㈱
サン・アロー化学㈱	竹野	日本加工製紙㈱	理研ビニル工業㈱
三晃プラスチック㈱	龍田化学㈱	日本ゼオン㈱	ロンシール工業㈱
サンビック㈱	㈱タツノ化学	日本ビニル工業㈱	

■編集後記 ■

★「PVCニュース」第3号も、関係部門の多大な協力により無事発行することができました。★本号のトップニュースは、エネルギー・資源回収WGが担当する『PVC無公害焼却システム確立』についての中間報告です。取り組みは順調に進捗しており、来年3月の総合報告に対して期待が募ります。1日も早くと首を長くして待っているのが、関係者の一致した思いでしょう。★最近、新聞紙上などで『塩ビは環境にやさしくない』、すなわち焼却時に発生する塩化水素ガスが酸性雨の原因になるとの理由で塩ビの使用を中止する事例が報道されています。しかし、塩ビは本当に『環境にやさしくない』のでしょうか。本誌がこの問題をもう一度総合的に考え直すための参考となれば幸いです。★我々塩ビ関係者は、1人でも多くの人に正しい塩ビを理解してもらえよう、たゆまぬ努力を続けていきたいと思えます。(慎)

■この件に関するお問い合わせ先

塩化ビニルリサイクル推進協議会

〒100 東京都千代田区内幸町2-1-1 (飯野ビル3F317号)

TEL. 03 (3501) 2010

Japan PVC Recycle Promoting Council (略称: JPRPC)